

楽園の影に立ち向かう日本人女性

松本 佳吾

東京八王子にフラダンススタジオを展開している大滝由美さんは、オアフ島の西側に位置するワイアナエの子どもたちを救おうとしている。この地区にはネイティブハワイアンの子孫が住んでおり、貧しい家庭が多い。そして、生活が息苦しくなりホームレスとなる人もいる。彼らは、住む場所を失い、テントを張って生活をするのだ。ワイアナエの人々は主に、自給自足で生活をしているが、最低限の生活を送るために、日雇い労働などをし、中には物乞いさえする人もいる。

彼女はワイアナエの貧困を取材したあるドキュメンタリーを観て、伝統文化であるフラを伝えてくれたハワイへ恩返しをするべく、フラのチャリティーショーを開催したり、フラダンス教室のTシャツを販売したりして資金を募り、ワイアナエに送金している。

ワイアナエの貧困率は約12%にもおよぶ。そのため、ワイアナエの子どもたちは十分な教育を受けられていないのだ。加えて、彼らの生活水準は低い。放課後に使ういくつかの施設の天井は壊れていたりする。彼女がワイアナエを訪れた際、厳しい現実にも関わらず、子どもたちは、気さくに彼女を「ALOHA！」と笑顔で無邪気に歓迎したそうだ。

子どもたちは、一日に一回だけの食事を学校の給食でとる。学校では、良い成績をとったり、クラスメイトに良いことをしたりするとクーポンが貰え、それで学校からの配給と交換できる。州政府はシェルターなど、子どもたちのために少しでも心地良いと思ってもらえる居場所を提供してはいるが、決してこれが持続的に彼らの生活を豊かにしている訳ではない。

彼女は日本のフラの同業者達がハワイの貧困について無関心であることに落胆した。実際、彼女も娘に自身の目で「楽園の影」を見てもらいたい、と現地へ連れていった。「全くの草の根運動ですが、私のライフスタイルです。」と彼女は最後に誇らしく語ったのである。

ハワイは私たちが想像する楽園ではない。まず、この貧困問題を認知することが重要だ。ハワイの貧困に気づくことがよりよい未来への鍵を握っているのだから。

【編集後記】

今回の記事は私が初めて担当する記事でした。今回の記事は、ハワイの貧困に懸命に取り組む1人の日本人女性への取材を通じて、私が旅行で目の当たりにしたハワイの貧困を多くの読者に伝える、という趣旨で作成しました。ハワイの貧困というあまり知られていないテーマでしたので、なかなか取材先が見つからず苦労しましたが、なんとかアポイントメントが取れました。唯一の取材先である大滝さんは、真摯に私の質問に応じて下さいました。取材をしてみると、インターネットで検索しても出てこない現場の生の声を聞くことができ、大変勉強になりました。今回の記事作成の経験を次に活かしたいです。